

連載：[海外] グローバル体験

第7回 街から景気を読む（ITバブル崩壊）

研究員 杉本 晴重

好景気のシリコンバレー

1998年末からは、米国西海岸のシリコンバレーに駐在した。当時、注目されたF T T H（光アクセス）、I P電話製品の市場開拓とベンチャー企業との協業探索が、主たるミッションだった。当時、シリコンバレーは、情報通信分野で第二、第三のシスコを目指して、高速データ通信やI P電話、セキュリティ関係のベンチャー企業が多数起業し、株価も上昇を続けた。

シリコンバレーには人が集まり、パロアルト等の街々にも新装開店のお店が増え、スタンフォード等のショッピングモールも活況を呈していた。サンフランシスコから南へ伸びるハイウェイ101は、いつも大混雑で渋滞し、赴任した際のアパート探しにも苦労し、家賃も異常に高かった。1999年、2000年と好景気は続き、毎年、家賃が上がったが、2001年になると、この異常景気（ITバブル）が突然はじけた。

増えた「SALE」の看板

まず、株価が下がり始め、常連だった寿司屋に、行列がなくなった。店の主人は「アメリカ人は景気、特に株価に敏感で、株価が上がれば家族で頻繁に食べにくるし、株価が下がると来店頻度がいっきに下がる」と言っていた。

ベンチャー企業だけでなく、大企業の中にもレイオフする会社が増え、あれだけ混雑していたハイウェイ101も空いてスムーズに流れた。

街にも空き家、空きオフィスが増え、「SALE」の看板も目立ち始めた。アパートの家賃も値下がりしたが、それでも空き室は、埋まらなかった。全米でもシリコンバレーの生活費や住宅費は特に高いので、人々は失業すると住めなくなり、他の地域へ引っ越さざるを得ないからだと聞いた。

景気の影響を受ける資産

アメリカ人は資産を預貯金よりも株や投資信託、不動産として所有する事が多いので、景気の影響を大きく受けることも背景にある。

アメリカ景気の先行指標

しかし、シリコンバレーが駄目でも、西海岸にはサンディエゴ、シアトル等にもIT企業は多く、アメリカ人も他地域へ移動する事をいとわない。日本でも似たような景気の影響は出るが、シリコンバレーの街の動きは、アメリカ景気の先行指標のようにも見えて興味深かった。

そして、このITバブルの崩壊が契機となって、私も帰国となった。

—以上—